

石川県立図書館行政視察報告書

会派「市民の会」大塚 正俊

日 時 令和 7 年 8 月 7 日（木）午後 9 時 30 分から 11 時

テーマ 「会話のできる図書館について（石川県立図書館）」

石川県立図書館は、2022 年（令和 4 年）7 月 16 日に開館した新しい図書館で、延床面積 22,721 m²、開架冊数約 30 万冊、閲覧席数約 500 席、書庫の収蔵能力は約 200 万冊。

館内には、閲覧エリア（一般閲覧スペース、児童コーナー等）、知と情報のひろば・情報のアトリエのエリア（屋内広場、多目的ホール、交流ルーム等）、書庫エリア、事務管理・共用部エリアの 4 つのエリアが設けられています。

愛称は「百万石ビブリオバウム」。図書を意味するラテン語の「ビブリオ」と木を意味する「バウム」を組み合わせ、建物、蔵書の規模感を「百万石」を冠して表しているとのこと。本だけでなく『人・モノ・情報』との出会いを通じて県民の皆さんの成長を後押しし、図書館そのものも進化し続けるようにとの思いが込められています。

建物のコンセプトは「思いもよらない本との出会いや体験によって、自分の人生の 1 ページをめくることができる場所。」とし、巨大な吹き抜けの空間に、何重にも円を描くように本棚が配置されている光景は圧巻です。

『調査の概要』

1. 「会話のできる図書館」のコンセプト

国立国会図書館（NDL）が 2019 年に実施した「図書館利用者の情報行動の傾向及び図書館に関する意識調査」では、1 年間で 1 回でも公共図書館を利用した人の割合は 41%となっています。新・県立図書館では、利用したことのない約 60%の方に来場してもらうための仕掛けづくりを検討しました
公立図書館としての新たな挑戦として、

①本との思いがけない出会い

普段、本を読まない人でも、つい本に手が伸び、思いがけない本と出会えるような本の並べ方の工夫

②新たな体験や出会いの場

「閲覧エリア」のみならず、様々な体験や新たな人・モノ・情報と出会える場を設定

③「第 3 の居場所」

その日の気分に応じて、様々な色や形の椅子・ソファーを選べる、「家庭」でなく、「学校や職場」でもない「第3の居場所」を創出

図書館の運用方針の大きな変更

⇒「禁止」から「許容」へ おしゃべり OK、場所により食事 OK

2. 文化交流エリア

この図書館では、通常の図書館にある「閲覧エリア」の他に、「文化交流機能」として、研修室やラーニングスペース、モノづくりや食文化を体験するスペース、カフェなど、交流するための様々な機能を備えたエリアがあります。

本で学んだ知識をもとに活動する、あるいは体験によって得られた学びを深めるために本を読むといった、当館ではインプット（＝本を読む）とアウトプット（＝イベント等を通じて体験する）を上手く循環させるため、食文化体験スペースや研修室などの活動の場を提供しています。

また、単に貸スペースとして提供するだけでなく、当館が様々なイベントを主催することで、本を読むだけで終わらない、読書・体験が一体となった取組を工夫しています。

3. 利用者に優しいルール

どんな方にも利用しやすいような優しいルールで運営しています。

①飲食について

文化交流エリアでは飲食を可とし、閲覧エリアではふたの付いた飲み物の持ち込みを可としています。

②会話について

「賑わいにあふれる図書館」という当初より掲げてきた施策を実現するため、サイレントルーム等の一部の部屋を除き、全域で認めています。

③自習について

閲覧席では、読書以外に勉強や仕事をして問題ありません。Wi-Fi も全域で提供しています。

『考 察』

会話や飲食禁止が通常であった図書館の常識が、変わりつつあります。今、話題を集めている図書館では、会話ができて飲食ができるのが常識となっています。

更に、本を読む、借りるだけの図書館から、図書館で楽しむ、交流する機能を持たせています。

図書館に縁遠い市民に対し、図書館で楽しんでもらう機能を付加させること

で利用者を増やし、本に親しむことにつながると考えます。

一般的に、書籍は「日本十進分類法（NDC）」という分類法に基づいて並べられていますが、テーマごとに並べることで本を手に取りやすくなると考えます。

図書館の利用者を増やし、活用してもらうために旧来の方式となっている市内の図書館をリニューアルすべきと考えます。